

華奢な実行委員長 熱い思い

「負けるもんか」これが今年の体育祭のスローガンでした。

自由の森学園は点数をつけて生徒を序列化することをやめ、一人ひとりの生徒を一人の人間として育てる教育を目指して設立されました。ここには、いわゆる偏差値や学年順位というものが存在しません。本来の学びは競争に打ち勝つことを目的として行われるのではなく、生徒一人ひとりの自立と成長のために必要なものだと考えています。

その自由の森学園で、年に1日だけ、点数を競い、勝ち負けをつける日、これが体育祭です。今回の体育祭の実行委員長をとめた高校3年の田口冬来君。小柄で華奢な体格でお世辞にも体育祭向き?とは言いがた

体育祭

まなぶ

いキヤラクターですが、彼には体育祭にかける熱い思いがありました。高校に入学してすぐに行われた体育祭に彼は度肝をぬかれたのだそうです。

事前の全校集会での盛り上がり、当日、グラウンドに生徒が集まってひとつひとつの競技に気持ちが集まる雰囲気がたまらなく好きだと言います。2年前から彼の中には、体育祭の中心になって活躍する憧れが育ち始めていたのでしょう。

体育祭の直前に改めて話を聞いてみました。実行委員会本部が以前より少し明るくなってきたかなと感じているそうです。彼はこんなことも言っています。

「それでもやっぱり自分の立ち位置は難しい。ただ、最近、住んでいるマンシヨンの人に自

分の学校の名前をすつと言えたことに気づいた。以前は遠いところか飯能とかあいまいに答えていた。どっかで自分が変わったのかなあ」

中学時代の彼は、勉強が面白かった。自由の森学園に入学したのは、知人の卒業生に紹介されたことがきっかけです。小学生のころから地域の少年団に参加していて、ここに来ていた大学生から自由の森のことを聞いたのだそうです。

少年団では、子どもたち自身で考え、企画してさまざまなイベントを行っていました。

彼は、少年団みたいに学校がなかったらいいなと考えており、将来は学校の教師になりたいと思っています。生徒と先生の関係がもっと近くなるといいと考えているとのことでした。

自由の森学園校長

鬼沢真之